M.ベルトミュー：5 つのニュアンス

フランスの作曲家マルク・ベルトミューが 1964 年に作曲した、フルートとハープのためのデュオ。5 篇の小品それぞれが洗練された味わいを持ち、優しい雰囲気に包まれて、甘美な夢のなかへ誘われるような作品となっている。

N.ロータ：フルートとハープのためのソナタ

イタリア・ミラノ出身のニーノ・ロータは、フェリーニやコッポラと組んだ映画音楽の巨匠として名高いが、本人も語っているようにクラシックの作曲家が本業であり、近年はクラシック作品の演奏機会も増えている。この「フルートとハープのためのソナタ」は 20 代半ばの 1937 年に作曲。全 3 楽章からなり、イタリアらしい風通しの良さと、気品のある古風な佇まいを感じさせる。

P.パターソン：蜘蛛

イギリスの現代音楽作曲家ポール・パターソンは、王立音楽院でトロンボーンと作曲を学んだ。大規模な合唱曲が有名だが、いくつかの楽器のために独奏曲も書いている。全 4 曲からなる独奏ハープのための組曲《蜘蛛》は 1983 年の作。それぞれの蜘蛛の特徴をとらえたユニークな作品で、独特の素早い動きやゆっくりと獲物を睥睨する様が描写されている。最後を飾るのは蜘蛛の王者タランチュラ！

武満 徹：海へ III

全 3 曲からなる《海へ》は、鯨保護キャンペーンの一環として自然保護団体グリーンピースの委嘱により 1981 年、まず第 1 曲「夜」が書かれ、その後、第 2 曲「白鯨」、第 3 曲「鱈岬」が書かれた。《海へ》には楽器編成の異なる I から III までのバージョンがあるが、全てにアルト・フルートが用いられる。武満には「水」に関連した作品が多く、とくに本作では「海（SEA）のモチーフ」と呼ばれる「Es－E－A」の 3 音動機が要所で登場する。

H.ツェンダー：月の書（洛書 II）

指揮者としても活躍したドイツの作曲家ハンス・ツェンダーは、日本の伝統文化にも造詣が深く、東洋思想に影響を受けた作品を残している。また、意中のテーマを連作化することも多く、《洛書》は 7 作を数え、それぞれ楽器編成も異なる。「月の書」と題された《洛書 II》は、1978 年に作曲されたフルート独奏のための作品。

バルトーク（P.アルマ編）：ハンガリー農民組曲

原曲はバルトークのピアノ独奏曲《15 のハンガリーの農民の歌》で（第 6 番を除く）第 1～5 番と第 7～15 番をフルートとピアノのために編曲したのが本作。1952 年、フルートの名手ランパルのために編曲を手がけたのは、リスト音楽院でバルトークの薫陶を受けたピアニストのイムレ・ワイスハウスで、彼は「ポール・アルマ」の名で作曲家としても活動していた。大きく 3 部に分かれ、中間部のスケルツォ以外はメドレーで続けて演奏される。